



### 「玉石混淆」

名誉院長 西田 敬

原稿も視ずに40分以上も理路整然と意見を滔々と開陳できた。然し、ロシア問題が絡めば忽ち逆上の余、支離滅裂な罵詈謗が60分間は止まらなかった。これは鬼才、Isaac AsimovがHitlerの雄弁振り、及び過激な性格を活写して寸評を加えたもの。更に、Hitlerは人ぞ知る極度のcarcinophobia(癌恐怖症)。ユダヤ系のOtto WarburgがHitler政権下で、ガス室にも送られずに癌研究に没頭出来た理由。と、真しやかに話は続く。医者の評判なんて儂いもので、性腺に見られるステロイドホルモン産生細胞であるLydig cell。人類、詰りhomo sapiensでは種特異的に、その細胞質中にラインケの結晶体(Reinke's crystalloid)の出現を認める。勿論、ドイツの解剖学者Friedrich B Reinkeに因んでの命名であるが、態々訪れてみれば、今や、墓もない荒地。文字通り、将に儂い話。

そうした中に、Warburgから発信された、発癌を避ける為の提言は癌治療が行詰った今日、甚だ貴重。多細胞生物の酸素消費量の測定は、manometerを駆使したWarburgの独擅場で、当時の生化学領域では最先端の分野である。知見の一つに、充分なる酸素の存在下でも癌細胞は嫌気性解糖に頑なに拘ることが知られている(Warburg Effect)。

回教徒が頻りに暗唱しているコーランでは、4週齢児を、野山でヒトに取付いて吸血する、蛭(leech)に喩えている。母胎内での発達状況から表現すればfirst trimester(最初の1/3妊娠期間)を過ぎ、second trimester(次の1/3期間)へ向かう移行期に相当。児を賄う栄養の供給手段も、それ迄の生殖管上皮から滲み出る局所的な栄養液(histiotroph)に留まらず、胎盤循環した血液で運ばれるhemotroph(血液運搬栄養)も始まる時期である。当然、胚子も子宮内膜へ着床し、深達度も絨毛組織が血管内皮に到達するendotheliochorial placentaionと為る。糖代謝で云えば、それ迄の嫌気性解糖から好気性解糖も可能に為る代謝経路の移行時期に相当している。回教の経典、コーランに掲かかぎであるMuhammadの御託宣が正鵠を得ているか否か、少なくとも、胎児発育の面では時宜的に納得できる教えである。

ところで、Otto Warburgによれば癌組織は、喩え酸素の存在下にあっても嫌気性解糖に拘る。生物の進化に逆らった異端者と謂える。何しろ嫌気性解糖は地球の誕生以来20億年もの間、地球上の生物の唯一のエネルギー獲得手段であった。如何にすれば、生物進化の異端者である、癌組織を矯め直せるか？

